

福島原発事故をふりかえる

アカデミアの視点から 福島原発事故を内省する

原子力学会誌 編集長 佐田 務

* 今日は原子力学会誌での特集総括を紹介

* 専門は社会学

原子力学会誌「アトモス」での福島原発事故特集

2021年1月～6月号で特集「1F事故とその後」を掲載

1月号 原子力施設立地点首長／ 2月号 有識者／ 3-4月号 学協会
5月号 民間第二事故調(鈴木氏)、元国会事故調(畑村氏)
6月号 学会内(学会事故調提言フォローWG、廃炉検討委、福島特別プロ)
に計180pを寄稿いただき、多角的な視点からの分析をめざした。

基本的視点は「**私たちはまだ、福島原発(1F)事故の教訓を十分に
学びきれていないのではないか**」それはさらなるハード的な安全向上ではない

今日は3点を指摘

- ・セクター間のコミュニケーション不全(知の連携や統合)
- ・政策決定過程の最適化(自治体の役割、ステークホルダーの参画)
- ・原子力コミュニティの意識

1.学の連携はいまだに限定的

セクター間のコミュニケーション不全（部分最適化による全体不適）

科学技術をめぐる知は、高度化するために専門化。それらの知が完全に統合されることはない。そこからこぼれ落ちた部分が時として、事故の遠因として顕在化。

原子力学会事故調は1F事故後に、「他のアカデミアを含めた俯瞰的な討論と協働のための『場』を構築し、主導的な役割を」と述べた。

けれども原子力学会での取り組みはANFURD（福島復興・廃炉推進に貢献する学協会連絡会）の設立と運営など、いまだに限定的。社会科学を含めた異分野との相互触発、多くの研究分野にまたがる「知の統合プラットフォーム」の構築にはほど遠い。

このため、「知の統合からこぼれ落ちた部分が事故の遠因として顕在化する」ことをわすかでも軽減できないかというのが、企画の趣旨。

2. 能動的な「中央」と受動的な「地方」

—「客体」にとどまる地方の悲哀 → **自治体の役割の最適化**

原発立地自治体首長からは、「国のエネルギー政策に翻弄される声」や「規制委や国の対応への不満」が。その背景には一

あ

- ・行政庁や規制委・・・主体的で能動的な「中央」
- ・立地点・・・客体で受動的な存在の側面が優勢な「地方」

あ

自治体は**受容**するか**拒否**するか、**取り引き**するかという3択を迫られる。

➡ そこには受動的であるがゆえの切なさや無力感が。

原子力政策決定過程における**自治体の位置づけの理想的な姿とは。**

- ・例えば県立の原発を作り、その利益が地元還元させるしくみは。

3.有識者の視点と論考

- ・原子力コミュニティは、備えるべき対応を怠っていた
- ・国家的なクライシスマネジメント体制が不十分だった
- ・安全規制はさらなる最適化を図るべき
- ・原子力をめぐる意思決定への市民参画
- ・戦略や司令塔がない原子力政策
- ・東北大震災と1F事故は、欲望のままに進む社会への警告ではないか

4.学協会による多様なパースペクティブ

- 震災関連死者は2千人ほどに。その教訓抽出と反映は十分か。
 - 救援者へのケアに対する配慮 **緊急時対応の備えは十分か**
 - 賠償金の格差がコミュニティの再構築を困難に **事故後の補償体制は精査されたか**
 - リスクが顕在化した場合の影響度が著しく高い対象に対しては、多くのステークホルダーを交えた意思決定プロセスを。
 - 原発問題の背景にある社会の構造や変動に着目すべき
-
- 国民は原子力の便益だけでなく、リスクを十分理解した上で電気を使ってきただろうか、さまざまな関係性を捨象した社会は暮らしやすい社会か。
-
- 事故の科学的・技術的な検証は十分になされているか。

5. 原子力コミュニティの意識

事故後の各調査報告書や関係者の努力により、原子力発電所の安全性は格段に向上した。しかし学会事故調が指摘した一

- ・「所属組織の利益より公益を重視する姿勢」は原子力関係者に浸透したか
- ・他分野との協働による俯瞰的な視点からの取り組みは十分か。
- ・安全神話から決別し、他者や過去から学び続け、社会と対話し続けるという内省と謙虚さを持ち続けているか。

6.小括

- ・「想定外の事故」は防ぐことはできない。けれども最善の人智を尽くせば、その可能性を極限まで小さくすることはできる。福島原発事故前、事故後の私たちの取り組みは、最善をめざしたものだっただろうか。あり続けているか。
- ・この事故は原子力のみならず、この世の中のさまざまなことがらについて問いかけた。世の中はそのことにどうこたえているのか。
- ・この世の中は、私たちが何を望み社会がどうあるべきかという真剣な検討がなされないままに、経済と技術が結びついた所産物の集積体へと変容しつつあるように思える。その背後には、無限に膨張する人々の欲求を充足し触発することをめざす市場の姿が見える。
- ・この事故は、そんなありようを内省する機会を与えたものではなかったか。